楡の花散る学都にぞ理想のあとに憧憬れて 神青春 のあとに憧憬れて の夢高く

綺花を流して逝く水に ながなが を求む若人は

の春を嘆くなり

牧\*\* 場ば

ő

の緑草踏み

しだき

うち振る鞭の音も高 の 駒に鞍置きて

の大空を朗らか <

白雲流れゆく手稲山静寒歌を歌ひつ眺むれば か

四

涯なく白き石狩のはてしるいとかり 疎林のほとり夕陽は落ちてゃり さへも絶えし真夜に

銀<sup>ゅ</sup>雪\* せ乍ら橇唄は 「に連なる曠野の静寂 を縫ひてゆく

落葉踏みゆく雄き子は 三年の絢夢に涙する 沈黙の原始に散りしける の群の片影もなし 唆の蒼空に銀月冴えている きょっち 鐘の沈みゆき

北斗は遠 「妄なしふ Ŧi.

真実一路の迪恵ぬ く七星清し の現世を見下して

「意気」と「血潮」に生くる子のいき

瞳に燃ゆる紅焰は

永遠なる生命の証

なり

児山 有村徹 信 蔵 君 君 作 作 Ж 詇